

翻 訳

ある肖像画の物語

ヘンリー・ジェイムズ 著

The Story of a Masterpiece

by Henry James

李 春 喜 訳

LEE Haruki

“The Story of a Masterpiece” was published from January / February, 1868 in the magazine, *Galaxy* when Henry James was 25 years old. This story is about a portrait painted by one Stephen Baxter who was at one time engaged to the model of the portrait, Marian Everett. Although Baxter and Everett were engaged, they were not able to marry partly because Baxter’s lack of success as an artist. Several years later, Marian is engaged to John Lenox, a wealthy widower. Lenox meets Baxter through his friend, then he asks Baxter to paint the portrait of Everett. Observing the portrait of Everett, Lenox learns that there was something between Baxter and Everett that Lenox had not been aware. Although he marries Everett, he doesn’t like the portrait and destroys it at the end of the story.

This story is probably categorized as one of James’ so-called art stories. For James, art reveals the truth in life. In this story, too, the portrait of Everett reveals certain truth about something that lies in the heart of the painter. “The Story of a Masterpiece” might be a prototype of James’ later, important works.

キーワード

Henry James (ヘンリー・ジェイムズ)、Short Story (短篇)、Translation (翻訳)、Resolved Plot (神話的物語)、Art Stories (芸術もの)

I

昨年夏の時点からそんなに以前というわけではない。ニューポートに滞在していた六週間の間にジョン・レノックスはニューヨークのマリアン・エベレットと婚約した。レノックスは奥さんを亡くし、大きな屋敷に住んでいたが子どもはなかった。彼は三五歳で、大変際立った外見をしており、極めて礼儀正しく、信頼するに足る豊富な知識を持ち、非の打ちどころのな

い習慣を身につけ、短い結婚生活の間に試練でもありまた有益でもあった猶予期間を経験した男性特有の落ち着きを持っていた。したがって、エベレットにとってこの縁談はどこから見ても申し分なく、どう考えても悪い話ではなかった。

エベレットも——見た目のぱっとしない従姉妹たちと区別するために「かわいいエベレット」と呼ばれていた——ちょうど適齢期だった。彼女には母親も姉妹もなかったので、世間体のことを考えると、これらの素晴らしい従姉妹たちの満足のためというよりは、自分の満足のために多くの時間を彼女たちと過ごさなければならなかった。

マリアン・エベレットは大変貧しかったが、女性を魅力的にするすべての恵みを天から豊富に与えられていた。彼女が生活し交際する人々の中でエベレットが最も魅力的な女性であることに異論を唱える者はいなかった。豊富な経験を積み、言ってみれば人格も磨かれ、既婚であるおかげでより自由に振る舞える年配の女性でさえエベレットほどの魅力はなかった。エベレットより自由に振る舞える従姉妹たちと社交上のたしなみを張り合っている、未婚女性の品格という厳しい規範からエベレットが逸脱することはまったくなかった。彼女は趣味の良さというものにほとんど宗教的ともいえる愛情を注ぎ、同年齢の多くの女性が派手に振る舞うのを見て怯えていた。したがってエベレットは、ニューヨークで最も魅力的な女性であるだけでなく、最も非の打ちどころのない女性でもあった。彼女の美しさについておそらく意見を異にする人もあるかもしれないが、その美しさに並ぶ女性はいないことは確かだった。中背よりわずかに低く、豊かで丸みのある体つきが特徴的だった。しかし、この魅力的なふくよかさにもかかわらず、彼女の動きは完璧なほど軽やかでしなやかだった。ブロンドの髪——暖色のブロンドと言うべきか——の人がよくそうであるような顔色に、頬は夏の盛りのような色合いを帯びていた。彼女の赤褐色の髪に真夏の太陽の光が織り込まれていた。古典的なモデルに型取られたような顔立ちではなかったが、その表情は申し分なく魅力的だった。額は低くて広く、鼻は小さく、口は——彼女を妬ましく思う人たちから巨大だと言われていた。彼女の口は微笑のための素晴らしい可能性を備えているのは確かで、彼女が唄を歌うために口を開けるときの（彼女は永遠の美しさでそうするのだが）、それは豊かな音の流れを発するのだった。彼女の顔は少し丸みを帯びていて、少しいかり肩だったかもしれないが、先に述べたように、全体の印象はこれ以上望めないほど好ましいものだった。彼女の顔立ちや姿の特徴について十ばかりの意見の不一致を指摘することができるだろうが、それが生み出す印象を無効にする試みには必ず失敗に終わるだろう。女性の美しさを細部にわたって証明したり反証したりする試みには本質的に野蛮で、実際、知的ではない何かがある。厳密には、異なる特徴の集合体が全体を構成することはないと分かれば、自分が受けるに値する以上のものを男が得ることはないだろう。男たちはそばを離れ、足し算は彼女に任せればよいのである。美しさに加えて、エベレットは性格の良さと活潑な洞察力によっても優れていた。彼女は不愉快な発言はしなかったし、不愉快な発言に対して憤りもしなかった。その一方で、知的な聡明さをとても楽しみ、それを育みさえした。

彼女の素晴らしい美点は、何かを要求するわけでもなければ主張するわけでもないことだった。彼女の美しさにはわざとらしいところがまったくないのと同様、聡明さには術学的なところもなければ、彼女の気立ての良さには感傷的なところもなかった。美しさはまったく新鮮で、聡明さと気だての良さはまったく好ましい類のものだった。

ジョン・レノックスは彼女に出会い、恋に落ち、彼女にプロポーズをした。世間の目には、その申し入れを承諾することによって、彼女に不足していた一つの強み、つまり申し分なく安定し信頼できる地位をエベレットは手に入れるように見えた。彼女の友人は、幾分不安定な彼女の過去と対照的な輝しく心地よい彼女の未来とを比べて小さからぬ満足感を得ていた。レノックスは確かに誰からも祝福されたが、彼の信念についてはそれほどでもなかった。道徳的なことを言いたがる知り合いから、レノックス氏が彼女を選んでくれたことにマリアンは感謝すべきだとしばしば言われたが、彼女の信念はそんなに激しい試練に試されたわけではなかった。こういった人たちが口ぐちに大丈夫よと言ってくれるのをマリアンは辛抱強く謙遜して聞いていた。そしてそれは彼女にとってとても相応しい態度であった。

エベレットとレノックスの婚約が発表されて二週間もしないうちに、二人ともニューヨークに戻った。レノックスは自分の住まいに手を入れたり家具をそろえたりして忙しくしていた。というのも、結婚式が十月の終わりに予定されていたからだ。エベレットは父親と部屋を借りて住んでいた。エベレットの父親は年齢のためにすっかりくたびれてしまっていた。そして、娘の結婚がもたらしてくれる様々な見通しのせいで朝から晩までもみ手を繰り返しているのがあった。

ジョン・レノックスは日常的にするべきことがたくさんあった。読書、音楽、人づき合いを好み、政治を嫌うわけでもなく、八月の最初の数週間をそわそわと落ち着きなく過ごした。男性が中年に近づくと、婚約しているという事実を品良く身にまとうことや、婚約しているという立場に付随するちょっとした色々なことをそつなく気軽に片付けることが難しくなることに気づくものである。レノックスをよく知る人にとっては、レノックスの気の遣い方にはある種情けないまじめさがあった。自分の時間の三分之一をブロードウェイをうろうろすることに使い、週のうち六日は、エベレットにプレゼントするには幼稚で野蛮でくだらないと結論づけてしまうつまらない安物をそこから一杯抱えて帰って来るのだった。あとの三分之一はエベレットの客間で過ごし、その時間マリアンへの訪問者は彼女に会うことはできなかった。残りの時間を彼がどのように過ごしているのかは、レノックスがある友人に語ったように、誰にも分からなかった。これは彼の友人が耳にすると聞いていたより強い表現だった。というのは、レノックスは向こう見ずな発言をするような男ではなかったし、彼の友人が信じるころでは、激しい気性の持ち主でもなかったからである。しかし、彼がまさしく恋に落ちていることだけは、あるいは、少なくとも動揺していることだけは確かだった。

「彼女と一緒にいるときはとてもいいんだが」と彼は言った。「彼女と離れると、まるで生き

ている人たちの集団から放り出されたような気がするんだ。」

「ああ、君は辛抱強くしてなきゃ」と彼の友人は言った。「君が厳しい人生を送るのはこれからなんだ。」

レノックスは黙っていた。そして彼の友人が見たいと思う以上に彼の表情は暗くなるのだった。

「特に難しいことがあるというわけじゃないけど」と、レノックスの意識に重くのしかかっているものを彼から取り除いてやろうと彼の友人は続けた。

「時々心配になるんだ——彼女は僕を愛していないんじゃないかと時々心配になるんだ。」

「まあ、少しぐらいの心配は害にはならないがね。あまりにも自信があり過ぎて、愚かな行動に出るよりはいいさ。君が彼女を愛していることさえ確かならそれが一番だ。」

「そうだな」とレノックスはまじめに答えた。「そこが大切な点だ。」

ある朝、読書や書類に集中することができなくて、彼は何か時間をつぶすための気晴らしについて考えていた。

彼にはギルバートという名の若い画家の知り合いがニューポートにいた。レノックスは彼の才能や彼との会話をととても楽しんでた。その画家はニューポートを離れてアディロンダックに行き、十月一日にニューヨークに帰って来る予定になっていた。帰って来た画家はレノックスに会いに来よう誘っていたのだった。

私が先に触れた朝のことだが、ギルバートはもう帰って来ており、自分が訪ねて行くことを待っているに違いないという考えがレノックスの頭に浮かんだ。そこですぐさまレノックスは彼のスタジオに行くことにした。

ギルバートのカードがドアにかかっていた。しかし、部屋に入るやいなやレノックスはそこに見知らぬ人がいることに気がついた。画家がよく身につけているような服装をした若い男性が大きなパネルの前で仕事をしていた。レノックスは、彼がギルバートのスタジオにしばらく間借りしているということをこの男性から知った。しばらくするとその男性が少し席を外した。レノックスは当然彼が帰って来るのを待っていた。彼はその若者と話を始め、彼がとても頭が良く、見たところギルバートの仲の良い友人だということが分かった。そして少し興味を持って彼のことを観察した。年齢は三十に少し足りないくらいだろうか。背が高くがっちりとした体格で、強くて、楽しそうで、感じやすそうな顔つきをし、赤褐色で濃いひげをたくわえていた。レノックスは彼の顔に心を打たれた。その顔は人としての豊かな判断力を表し、画家としての本質的な気質を示していた。

「あのような顔つきをした男なら」とレノックスはひとり言を言った。「少なくとも見てみるだけの価値はある作品を描くだろう。」

そこでレノックスはその若い画家に絵を見せてくれないかと頼んでみた。画家は喜んで同意し、レノックスはキャンバスの前に立った。

そこには衣服を着た女性の半身が描かれていたが、レノックスにはそれが肖像画なのかまったくの想像で描かれたものなのか分からなかった。中世の豪華な衣服を身にまとった金髪の若い女性が描かれていた。ルネサンス期の伯爵夫人のように見えた。その人物は黒っぽいつづれ織りを背景に浮き彫りにされており、軽く腕を組み、頭はまっすぐに正面を向き、彼女がそっちに向いて歩き出してきそうな鑑賞者の方に目は向けられていた——「ベルベット地の洪水の中を、小さな足を引きずりながら。」

レノックスが彼女の顔を調べていると、それが彼のよく知っている顔——マリアン・エベレットの顔——に似ているように思えてきた。彼はもちろんそれが単なる偶然なのかそれともそのように意図されたものなのか知りたくなった。

「この絵は肖像画だと思うのだが」と彼はその画家に言った。「つまり『その人物になりきった』肖像画という意味なのだが。」

「いいえ」とその画家は答えた。「これは単なる作り物です。ここにちょっと、あそこにちょっとという具合に部分を描き込んであるだけです。この絵は、役に立たなくなったアイデアを捨てたゴミ箱のようなもので、ここ二、三年そばにかけっぱなしにしてあるんです。これまでの数知れない理論と実験の犠牲者ですよ。でも、見たところそれらのすべてから生き延びたようですけれど。ある種の生命力はあるのかも知れません。」

「タイトルはあるのかね？」

「もともと私が以前読んだものにちなんで名づけていました——ブラウニングの詩の『逝ける公爵夫人』です。ご存じですか？」

「もちろん。」

「その詩が、実際に存在していた肖像画の印象を言葉で表現しようとしたものなのかどうか私には分からないんです。でもそんなことどうでもいいじゃありませんか。これは単にその詩を読んだときの私の個人的な印象を表現しようとしただけなんです。その詩はいつも私の想像力に強い影響を与えていましたから。それがあなたの印象や他の多くの人の印象と一致するのかがどうか分かりません。でも、タイトルにはこだわらつもりはありません。この絵を所有する人は自由に名前をつけていいんです。」

その絵を長く見れば見るほどレノックスはその絵が気に入り、肖像画の女性の表情とブラウニングの詩のヒロインに与えた表情の間の一致がますます深くなるように思われた。そして、マリアンの顔とキャンパスの上の顔に共通しているあの要素もますます偶然ではないように思われてくるのだった。彼は、偉大な詩人の気高い抒情詩とその詩の微妙な意味、そして、その意味を表現するのに最もふさわしい人物として選ばれた彼の愛する女性の顔つきを思うのだった。

彼は顔をそむけた。彼の目には涙がたまっていた。「もし私があこの絵の所有者だったら」とついに彼は画家の最後の言葉に答えながら言った。「その絵が私に思い出させる人の名前とその絵

を呼ぶところですよ。」

「ええ？」とバクスターは言った。そしてしばらく間をおいて——「ニューヨークにいる人ですか？」

たまたま一週間前に、レノックスの求めにしたがって、彼とエベレットと一緒に写真館に行き、一ダースばかり様々なポーズで写真を撮ってきたところだった。これらの写真から気に入ったものを選ぶための見本版がマリ안의自宅に送られてきていた。彼女は気に入ったものを六枚ばかり選び——というよりレノックスが選んだのだが——レノックスは写真館に立ち寄って注文をするためにそれをポケットに入れて持っていた。彼はカバンから写真を一枚取り出しそれを画家に見せた。

「あなたの公爵夫人とその若い女性はとてもよく似ていると思うのだが」と彼は言った。

画家は写真に目をやった。「もし間違っていなければ」と少し間を置いて彼は言った。「その女性はエベレットです。」

レノックスはうなづいた。

画家は大きな関心を持ってその写真を調べていた。

「確かに私の公爵夫人はエベレットさんに似ているところがあります。しかしそれは意図的なものではありません」とついに彼は言った。

「私はその絵をエベレットさんに会う前に描き始めました。エベレットさんの顔はご覧のとおり——と言うよりご存知のとおり——とても魅力的です。そして、私が彼女に会っていた数週間の間、私はその絵を描き続けました。画家というものは——というよりあらゆる種類の芸術家は——どのように仕事をするかご存知でしょう。彼らは自分の属性をどこで見つけようとも、それは自分のものだと言い張るのです。私の目的に合ったものをエベレットさんの姿に見つけたとき、私はそれを取り入れることをためらいませんでした。特にそのとき、彼女の顔がとても効果的に表現していたある種の顔つきを暗闇の中で私は手探りで探していましたから。その公爵夫人は、私が思うに、イタリア人です。そして、私はその女性をブロンドにすることにしました。エベレットさんの顔色には、イタリアの女性が共通して持っているあの顔立ちの広さと厚みとともに、明確な奥深さと暖かい南部の雰囲気があります。その絵とエベレットさんの類似点は表情の問題というよりはタイプの問題です。しかしながら、肖像画を見てオリジナルが分かってしまうことに対してはお詫びします。」

「この絵を見てオリジナルが誰なのか私以外に分かる人がいるのかどうか疑問です」とレノックスは言った。そして、「私はエベレットと婚約したことを光榮に思っています。そこで、君にその絵を売るつもりがあるのかどうか聞く失礼をお許し下さい」と、しばらく間を置いてレノックスはつけ加えた。

「この絵はすでに売却済みなのです——ある女性に」と微笑みをうかべてその画家は答えた。「未婚のお嬢さんなのですが、ブラウニングの大変な崇拝者なのです。」

このときギルバートが戻って来た。二人の友人は挨拶を交わし、画家は隣のスタジオに戻って行った。最後に会ってから後どうしていたのかしばらく話し合ったあと、レノックスは公爵夫人を描いている画家と彼の素晴らしい才能について触れた。今までに彼のことを聞いたことがなかったことやギルバートが彼について話したことがなかったことに驚いたと言った。

「彼の名前はバクスターというんだ——スティーブン・バクスター」とギルバートは言った。「二週間前彼がヨーロッパから帰って来るまで、君が彼のことを知らないように僕も彼のことをほとんど知らなかったんだよ。でも、上達するという一つの見本のような男だ。彼とは一八六二年にパリで会ったんだ。そのとき彼は文字どおりまったく何もしていなかったよ。君が見たものはそのあとで彼が学んだことなんだ。ニューヨークに着いたとき、彼は十分な広さのあるアパートに住むのは不可能だと悟ったのさ。僕には少しスケッチがあるだけでそんなに広い場所を必要とするわけではないから、満足のいく場所が彼に見つかるまで、残りの三部屋を彼に提供してやったのさ。彼が自分のキャンバスをほどこき始めたとき、僕は知らずに天使をもてなしていたというわけさ。」

それからギルバートは、男を描いたものも女を描いたものも、バクスターが描いたいくつかの肖像画のカバーをレノックスがよく見えるように外した。この画家に対するレノックスの印象が間違っていないことをこれらの作品の一つひとつが示していた。彼はイーゼルの上の絵に戻って来た。マリアン・エレベットが彼の無言の呼びかけに応じて再び現れ、しみ込むような優しさとも悲しい目をして見つめるのだった。

「彼は自分に都合のいいことを言うかもしれない。肖像画が似ているのはある程度表現の問題でもある」とレノックスは考えた。「ギルバート、この絵を見て君は誰を思い出すかね？」この絵がどれだけ似ているか知りたくてレノックスはギルバートに尋ねてみた。

「この絵が君に誰を思い出させるか分かってるよ」とギルバートは言った。

「そして君もそう思うかい？」

「どちらも美しい女性で、どちらも赤褐色の髪をしているさ。僕が言えるのはそれだけだね。」

レノックスは少し安心した。マリアンの特別で独特な魅力が彼以外の男性のするどい鑑賞眼にさらされたという不愉快な気持ちがしないわけではなかったが、それは、彼のプライドと満足感という最初の瞬間と決して矛盾する感情ではなかった。画家は彼女の最も表面的な部分に感心し、残りの部分については彼自身の想像力が補ったのだと結論づけることができて彼は嬉しかった。歩いて家に帰る途中、この聡明な若者に彼女の肖像画を描いてもらうことは、彼にしてみれば、マリアンの美しさにふさわしい贈り物ではないかという考えがふと浮かんだ。彼らの婚約は今のところはまだ純粋に情動的な事柄のままである。しかも彼は、単に贅沢なものや楽しいことだけを提供する人物特有の品のなさが自分の容姿に表れていないか、ほとんど潔癖とも思えるほどの気の遣いようであった。実際、彼は未来の妻に対して、貧しい男性——単純で純粋な男性——に過ぎず、大金持ちなんかではなかった。彼は彼女と乗馬に出かけ、花を

贈り、オペラに出かけるのだった。しかし、彼は彼女に甘いお菓子を贈ったことも、彼女と競馬場に出かけたことも、宝石を贈ったこともなかった。エベレットの女友だちは、真珠かダイヤモンドに飾られたささやかな婚約指輪さえ、彼はまだエベレットに贈っていないと言っていた。しかしマリアンは十分満足していた。彼女は生まれつき感情という舞台における偉大な女優であった。そして、この古典的な節度は結婚という大きな豊かさの裏返しだと彼女は本能的に感じていた。彼とエベレットとの関係が、いかなる程度であろうともどちらかの側の偶然の条件に左右されるようなものにはしないようにしようというレノックスの試みにおいては、彼は自分の本能を完全に理解していた。目に見える何か芸術的なものを彼の愛情の印としていつの日かエベレットに贈るという強く抗いがたい衝動にかられるであろうということ、そして、この世に二つとない種類のものであるという大きな満足を彼の贈り物をもたらすであろうということが、彼には分かっていた。そのチャンスが今訪れたように彼には思われた。彼女にそっくりな肖像画を夫が所有するために、彼女の忍耐と善意によって貢献する機会という贈り物以上に上品な贈り物など考えられるだろうか？

週に一度未来の義理の父と食事をするのが習慣になっていたもので、その同じ日の夕方彼は義理の父と食事をとみにしていた。

「マリアン」と食事の途中でレノックスは言った。「今朝、君の古い友人に会ったよ。」

「そう、どなた？」とマリアンは言った。

「バクスター氏だ。画家の。」

マリアンの顔色が少し変わった——ほんの少し。それは本当に驚いたときに自然に顔色が変わる程度だった。彼がアメリカに帰って来ていることを新聞で見っていたし、レノックスが芸術家仲間と親交があることも分かっているので、彼女の驚きが大きいものであるはずがなかった。「彼が元気でお仕事も順調にしているといいのですが」と彼女はつけ加えた。

「おまえはその男性とはどこで知り合ったのかね？」とエベレット氏が尋ねた。

「二年前にヨーロッパで知り合いました——最初は夏にスイスで、そしてその後、パリでお会いしました。何でも彼はデンビー夫人の従兄とかというお話でした。」デンビー夫人というのは最近ヨーロッパで一年ほどマリアンと一緒に過ごした女性だった——マリアンの母の古い友人で、お金持ちだが夫に先立たれ子供がなく病弱だった。「彼は今も絵を描いているのかしら？」

「そのようだよ。しかもとても素晴らしいんだ。人がどこかで目にしてもおかしくないくらい素晴らしい肖像画を二、三描いているよ。それと、僕に君のことを思い出させるような絵を一枚持っていた。」

「『逝ける公爵夫人』ですか？」とマリアンが興味深そうに尋ねた。「見てみたいわ。もしその絵が私に似ているとあなたがおっしゃるのなら、ジョン、それを買うべきだわ。」

「買ったかったんだけど、もう売れちゃってるんだ。じゃあ、君はそのことを知っていたんだね。」

「ええ、バクスターさんご自身から。まだそれが描きかけのときに見ました。そのときはまだ私がそれに似ていればいいのと思うようなものではまったくなかったのですけれど。その絵が彼にとっての『最後』の絵になって嬉しい、と彼に言ってデンビーさんにショックを与えてしまいました。実は、その絵のおかげで私たちはお知り合いになれたのです。」

「その反対じゃないのかね？」とエベレット氏がおどけて言った。

「どういう意味ですか？」とマリアンはとぼけて尋ねた。「バクスターさんとはローマのパーティで初めて会ったのです。」

「彼とはスイスで会ったと言ったと思うのだが」とレノックスは言った。

「いいえ、ローマです。出発するほんの二日前だったのです。彼は、私がデンビーさんと一緒であることを知らずに、実際、デンビーさんが町にいたことを知らずに私に紹介されたのです。彼はアメリカ人がとても苦手なのです。彼が私に最初に言ったことが、彼の描いている絵に私がとっても似ているということでした。」

「君は僕の理想が現実になったようだとか何とかだろ。」

「そのとおりですわ。でもまったくそんな感傷的な調子ではなかったの。それで私は彼をデンビーさんのところに連れて行ったの。彼とデンビーさんは姻戚関係でいと同じにあたることが分かったのよ。彼は次の日私たちに会いに来て、彼のスタジオに是非来るよう招待して下さいましたわ。あまりぱっとしない場所でしたけれど。彼はひどく貧しかったのだと思います。少なくともデンビーさんは彼にいくらかお金を都合したのだと思います。彼は素直に受け取っていましたわ。彼女は彼の敏感な気持ちを感じ取って、望むならお返しに彼女の絵を描いてもいいというようなことを彼に言っていました。彼も時間があればそうしたいと言っていました。それから彼はスイスにやって来て、その年の冬、私たちはパリで会ったのです。」

もしレノックスがエベレットと画家との関係を少しでも疑っていたとしても、彼女の話し方はその疑念をすっかり払拭するようなものだった。その若者の才能のことだけではなく、彼がエベレットの顔についてよく知っていることを考えると、エベレットの肖像画を描いてもらうように彼を招待すべきだとレノックスはすぐに提案した。

マリアンは嫌々でもなく、かと言って特に積極的というわけでもなく同意した。そしてレノックスはバクスターにその提案を試してみた。バクスターは一日二日考える時間が欲しいと言ったが、その後、喜んで引き受けると（手紙で）返信してきた。

二人の旧知の間柄が再びあらたにされるという見通しからすると、彼女の恋人の援助のもとステイブン・バクスターが彼女のところを訪れるものとエベレットは考えていた。実際、彼は一人で訪ねてきたが、マリアンは家にいなかった。その後、彼は訪ねて来られないでいた。そこで、マリアンがモデルになる日はレノックスを介して決められた。バクスターはまだ自分のアトリエを手に入れていなかったため、レノックスは自分の住まいの広くて明るい部屋を一つ——それはビリヤード部屋にしようとして計画されていたのだが、まだ準備ができていなかった

——バクスターが一時的に自由に使えるように提供した。肖像画に関してレノックスが特に希望を述べることはなく、場所や衣装の選択については直接関わっている二人に任せておくことで満足していた。マリアンの「特徴」をバクスターがよく理解しており、彼が彼女の趣味の良さに暗黙の信頼を置いていることがレノックスには分かった。

エベレットは約束の日の朝に父親であるエベレット氏のエスコートで現れた。エベレット氏は物事を望ましい形式で行うことを大変誇りにしており、あらかじめバクスターに紹介されていた。バクスターとマリアンとの間に短いが丁寧な挨拶が交わされ、その後で二人は仕事に取りかかった。エベレットはバクスターの希望や思いつきに気持ち良く応じ、同時に、どういうことをすべきでどういうことはすべきでないかについて多くの確信を臆することなく披露した。

彼女の確信が的を得ており彼女の希望は余すところなく共鳴できるものであることにその若い芸術家はまったく驚かなかった。頑迷で不自然な偏見と折り合いをつけることも、自分の最善の意図を近視眼的な虚栄心の犠牲にすることも要求されないことが彼には分かった。

エベレットが中身の無い女性であるのかどうかということはここで言及されることではない。しかし少なくとも、彼女は次のことを理解するだけの分別は持ち合わせていた。つまり、蒙を開かれた聡明さの関心は、それが絵画の主たる目的であるのだから、画家の視点から見て良いものであるべき絵によって最も良く満たされなければならない。さらに、彼女の名誉のために以下のことをつけ加えてもいいだろう。絵画が、その情熱の持続というまがい物——へたな模倣——以上の何かになるためには、情熱の要請によって遂行された絵画にどんなに偉大な芸術の真価が適切に付与されるべきであるか、彼女は余すところなく理解していた。そして、彼自身のためであれ他人のためであれ、非論理的で利己的な関心の介入ほど芸術家の情熱を冷めさせてしまうものはないことを、彼女は本能的に悟っていた。

バクスターは着実にかつ迅速に仕事をした。そして二時間も経った頃には彼は自分が絵を描き出していることを感じていた。エベレット氏はそばに座っていたので、二人をうんざりさせるような存在になりかねなかった。そこで彼は、安っぽいちょっとした美学的な話で娘のモデルとしての時間を楽しくすることが自分の務めであるかのような印象を与えることに見たところ一生懸命になっていた。しかし、画家が話さなければならない部分をマリアンが機嫌よく引き受けていたので、バクスターは仕事に集中することができた。

明日続きを行うことに決まった。マリアンは画家が同意したドレスを着ていた。そのドレスを着てポーズをとっていると「絵画的な」要素が厳しく抑制された。バクスターの目には彼女がこの上なく美しく見えることが彼女には分かっていた。彼女には彼の指が絵の主題を攻撃したくてうずうずしているのが見えた。しかし彼女は、衣装にはレノックスの同意も必要だという口実のもとレノックスを呼びにやった。ドレスは黒だった。レノックスは黒という色に反対するかもしれない。レノックスがやって来た。彼女は、バクスターの目に示されているよりも強い確信をレノックスの親切な目の中に読み取った。彼は黒いドレスに夢中になった。事実、

その黒いドレスは、母としての厳かな抗議のように、若い女性の失われることのない若々しさを保証し豊かにするだけのよう思われた。

「傑作が生まれることを期待しているよ」とレノックスはバクスターに言った。

「ご心配にはおよびません。」額をたたきながら、「ここに出来ています」とその若い画家は言った。

娘の二度目のモデルの日、前日の知的緊張のために極度に疲れていたのと、彼が座っていた椅子の心地良さのせいでエベレット氏は静かな眠りに陥ってしまった。そこにいた二人は規則正しい彼の寝息にしばらく聞き入っていた。マリアンは辛抱強く反対側の壁に耳を固定し、若い画家は自分の描いている人物とモデルとの間で機械的に視線を行ったり来たりさせていた。ついに彼は、五、六歩後に下がって自分の作品を確かめた。マリアンが視線を動かすと二人の目が会った。

「さて、エベレットさん」と、自分の声の調子が震えないようにしっかり努力しなければ、うわずっていたであろう調子で彼は言った。

「ええ、バクスターさん」とマリアンは言った。

二人は長い間しっかりと視線を交わしたが、最後にそれは微笑みに変わった——その微笑みは明らかに、神殿の祭壇の後にいる二人の天使の家族に属するものであり、天使たちはあの有名な笑いを顔に浮かべていた。

「さてと、エベレットさん」とバクスターは仕事に戻りながら言った。「人生ってこんなものですよ！」

「そうですね」とマリアンも言った。そして少し間があって彼女が言った。「なぜ会いに来られなかったの？」

「お会いしに行ったのですが、ご在宅ではなかったのです。」

「もう一度いらっしゃればよろしかったですのに。」

「エベレットさん、それが何の役に立つのです？」

「そうしていただければもう少し礼儀正しいということになっていたのではないのでしょうか。私たちは和解することになっていたかもしれませんわ。」

「今でも十分そのように思えますが。」

「いえ『その和解ではなくて』という意味です。」

「それは馬鹿ばかしいことだったでしょう。僕がどれほど真実の本能を持っていたかお分かりにならないのですか？ 会うという意味なら、それほど易しいことは他になかったでしょう。僕たちの過去やお互いの約束や謝罪などについて話すことはきっと不愉快なことになったと思います。」

エベレットは床から視線を上げ、半分とがめるような目で深く彼を見つめた。「それでは私たちの過去はそれほど不愉快なことだったとおっしゃるの？」と彼女は尋ねた。

バクスターは半分驚いて見つめた。「それは！もちろんですよ！」と彼は叫んだ。

エベレットは視線を落として黙っていた。

今この時間を利用して、読者の皆さんに上で交わされた会話が言及している出来事について急いで解説しておくのも一案だと思う。

あらゆることを考えると、ステイーブン・バクスターとの関係については夫に話さないでいた方がいいとエベレットは考えていた。彼女が話さないでいた部分を私がここで補っても、読者の皆さんはおそらく彼女の判断を理解されることと思う。

彼女が言ったように、エベレットはこの若い男性とローマで初めて出会った。そして二度にわたる出会いが彼の心に深い印象を残した。もう一度彼女に会うためならかなりのことをするつもりには彼はなっていた。したがって彼らがスイスで再会したのはまったくの偶然というわけではなかった。マリアンの付き添い人であるデンビー夫人とのある種の間接的な関係を彼は主張することができるので、マリアンとの再会を可能にするのはバクスターにとってはより容易であった。このご婦人の了解を得て、彼女たちと彼は行動をともにしていた。彼は彼女たちの行先を自らの行先とし、彼女たちが留まるときには彼も留まり、惜しみなく関心を払い礼儀正しく振る舞った。一週間も経たないうちに、人を疑うことを知らない善良な人間の典型であるデンビー夫人は、貴重な親類を発見して大喜びだった。生まれながらにして物事にこだわらない彼女の性格のためだけではなく、彼女を絶えず悩ませている身体的な悩みに促された無関心かつ非活動的な習慣のために、付き添っている女性がどのような時間の使い方をしていてもデンビー夫人が何か大きな意味を持つことはなかった。こういった時間がどれほど楽しく過ごされたかを想像するのにさほど努力は必要ではない。ヨーロッパの最もロマンティックな情景の中で行われた求愛はすでに半ば成功していた。アルプスの美しい景色の中で、生まれついた美しさが持つ先天的な知性のおかげで彼女は満足感を手にすることができた。その満足感によってマリヤンの社会的な品格は大きく高められていたのである。彼女がこれほどまで優位な立場にあるように見えたことはなかったし、これほど完全な自由や気ままさ、陽気さを経験したことはなかった。人生で初めて彼女は疑いを持たずに人を虜にしたのである。山や湖や溶けることのない雪、田園の峡谷に彼女は心を明け渡した。バクスターはそばに立ってそれを傍観していた。長い間心に描いていたスイスへの旅行が、その一部となっているエベレットによって——声の届く範囲内でほとぼり出る絶え間ない女性的な思いやりによって——山の湧水の冷たさと透明さとともに大きく増幅され美化されていると感じた。ああ！その女性的な思いやりもこの永遠の雪を糧としているのでなければ！彼女の美しさ——彼女の尽きることのない美しさ——は絶え間ない魅力だった。客間にいるエベレットはその場所でとても完璧に見えたので、それ以外の場所では彼女は美しく見えないのではないかと考えることがほとんど理にかなった考えであるかのようにであった。しかし実際は、バクスターが気づいたように、女性たちから「ひどい」と呼ばれるような状態——つまり、日に焼けて、旅行で汚れ、熱中症で、気分が浮ついて、空

腹といったような状態——においても、すべての不愉快な比較を免れるほど彼女は極めて美しく見えた。

三週間が経ったある朝、丘の緑のくぼみのはるか上方で、流れ落ちる急流の端にたたずんでいるとき、バクスターは告白へと彼を促す抑え難い衝動を感じていた。轟々と流れ落ちる急流の音がすべての声をかき消していた。そこで彼はスケッチブックを取り出し、真っ白なページに三つの短い単語を書いた。彼はそのスケッチブックを彼女に手渡した。彼女は美しく顔色を変え、彼の顔をちらっと素早く見てそのメッセージを読んだ。そしてそのページをスケッチブックから引きはがした。

「破らないで！」とバクスターは叫んだ。

彼女は彼の唇の動きで意味を理解し微笑んで首を振った。しかし彼女はかがんで小さな石を拾い上げそれをその紙に包み水流の中に放り投げようとした。

バクスターはどうしていいかわからず、それを彼女から取り上げるために手を伸ばした。彼女はそれをもう片方の手に移し、彼がつかもうとしていた手を彼に差し出した。

彼女は紙の包みを投げ捨てたが、彼には自分の手をつかんだままにさせていた。

バクスターにはまだ自由になる時間が一週間あり、マリアンはその一週間を大変幸せな一週間にした。デンビー夫人が疲れていて彼らは移動しなかったので、二人が一緒にいることを妨げるものは何もなかった。彼らは長い未来について大いに語り、彼らの声が水流の音を上回ったとき、二人でそれを追い求めることに急いで同意したのだった。

二人が貧しいことは彼らにとって不幸なことだった。このことを考えて、バクスターが懸命に働いて彼の収入が少なくとも四倍になるまで二人の婚約については何も言わないでおこうと彼らは決意した。これは残酷なことだったが絶対的なことだった。そしてマリアンは何の不満も洩らさなかった。彼女のヨーロッパ滞在は、かわいい女性の物質的欲求という概念を肥大化させた。そしてそんな経験をしたすぐ後で、彼女が貧しい芸術家と結婚することを急がなかったのはまったく自然なことだった。数日後、バクスターはドイツとオランダに向けて出発した。その訪問の動機のある部分は勉強することであった。デンビー夫人とその若い友人はその年の冬パリに出かけて行った。そして二月の中旬彼女たちはドイツへの旅行を終えたバクスターとここで合流したのだった。旅行中彼はマリアンから愛情のこもった短い手紙を五通受け取った。数は少なかったが、控え目な中にも絶対的な不変という彼女の甘美な香りを彼は感じ取るのであった。彼女は、当然彼が期待してもよい完全な素直さと優しさで彼を受け止め、将来に対する展望が開けたという彼の話に大きな関心を持って耳を傾けるのだった。彼のイタリアの絵が三点売れ、貴重なスケッチを描くことができた。彼は富と名声へと続く道にあり、彼らの婚約が発表されてはいけない理由はなかった。しかしマリアンはこの後者の提案に躊躇した——あまりにも強く躊躇し、その根拠があまりにも恣意的だったので、いくらか痛ましい場面が結果として起こった。スティーブンはいらいらし困惑して彼女のもとを去った。次の日、彼が彼女

を訪問したとき、彼女は具合が悪く彼に会うことができなかった。そして次の日も——次の日も。彼が空しくもデンビー夫人のもとを訪れた三日目の夕方、大きなパーティでマリアンの名前が人の口に上るのをたまたま耳にした。話をしていたのは二人の年配の女性だった。内緒にしておこうという努力がまったく払われていない二人の婦人の会話から、彼はマリアンが不幸な若い男性——二人の婦人のどちらかの一人息子のことのようにだが——の愛情を弄んだと非難されていることが分かった。どうやら証拠として解釈されるであろう事実や根拠が十分存在するようだった。バクスターはすっかり動揺して帰宅し、次の日、再びデンビー夫人のもとを訪ねた。マリアンはまだ自分の私室にいたが、デンビー夫人は彼を招き入れてくれた。ステイブンは大変困っていたが、彼の頭はさえていた。彼はデンビー夫人に質問をするという課題に取りかかった。デンビー夫人は若い二人の関係についてはいつものものぐさな調子でまったく無関心であった。

「残念なことですが」とバクスターは話し始めた。「昨晚、悲しむべき振る舞いのせいでエベレットさんが批難されているのを聞きました。」

「ああ、お願いですからステイブン」とその親類の女性は答えた。「その話を蒸し返さないで下さい。私はこの冬の間中、彼女の振る舞いについて言い訳をし、弁護することばかりしていたのですから。それは大変な仕事です。それをあなたに対してもさせないで下さいな。あの子のことは私と同じようにあなたもご存知でしょう。彼女は確かに軽率でしたが、彼女が悔い改めていることを私は知っています。その件はもう終わったのです。彼はまったく好ましい男性ではなかったのです。」

「そのことについて話している女性の言うことを聞いて、彼はとても立派な人のようだと思っていたら、その女性は彼の母親だったのです」とステイブンは言った。

「彼の母親ですって？何か間違っていないですか？彼の母親は十年前に亡くなっているのです。」
もう少し確かめなければいけないと感じてバクスターは腕を組んだ。「あれ？あなたは誰のことを話しているのですか？」

「キングさんのことですよ。」

「ええ！？」とステイブンは叫んだ。「ということは二人いるってということですか？」

「あなたは誰の話をしているのですか？」

「ヤングとかいう人ですよ。彼の母親は白い巻き毛の美しい年配の女性です。」

「マリアンとフレデリック・ヤングさんとの間に何かあったとおっしゃるつもりじゃないでしょうね？」

「何ですって！僕はただ聞いたことを話しているだけです。デンビーさん、あなたをご存知だと思っていましたが。」

デンビー夫人は憂鬱そうな動作で首を横に振った。「私は知りませんよ」と彼女は言った。「もうあきらめたのです。何かについて良し悪しを判断するつもりもありませんしね。若い人たち

の振る舞いは私が若かった頃とはずいぶん変わってしまいましたから。それが何も意味していないのか、あるいは何もかも意味しているのかもう誰にも分からないのです。」

「でも少なくとも、ヤング氏があなたの客間にいたかどうかはご存知でしょう？」

「ええ、頻繁にいらしてましたよ。マリアンがうわさの種になっているのはとても残念ですわ。でも、病気の女性に何ができました？」

「そうですね」とスティーブンは言った。「ヤング氏のことはもういいです。それで、キング氏のことですが。」

「キングさんは家に帰ってしまわれましたわ。彼がいなくなったのは残念です。」

「どういう意味で？」

「ああ、彼は頭が悪いのよ。女の子のことをよく分かっていないのよ。」

「何ですって」と、楽譜に記された「感情を込めて」という指示のようにスティーブンは言った。「彼はとても頭が良くて、女の子のことがよく分からなかったのかもしれない。」

「マリアンに分別がなかったというわけではないのです。彼女はただ気持ち良く人と接しようとしただけなのです。でも、少しやり過ぎました。彼女は申し分なく素晴らしかったのです。彼が最初にしようとしていることが彼女から言質を取ろうとしていることだと分かったのです。」

「彼は男前ですか？」

「十分。」

「そしてお金持ち？」

「大変お金持ちだと思うわ。」

「で、もう一人の方は？」

「もう一人って？ — マリアンのこと？」

「いいえ、あなたのお友達のヤングさんのことです。」

「ええ、彼も大変男前ですわ。」

「そして、お金持ち？」

「ええ、彼もお金持ちだと思いますわ。」

バクスターはしばらく黙っていた。「でもきっと二人ともやり過ぎてしまった？」とバクスターは続けた。

「私にはキングさんのことしか分かりませんわ。」

「ああ、でも僕はヤング氏について答えられますよ。彼の母親は自分の息子が悲しむのを見なければあんな話し方はしなかったでしょう。でも、それで結局マリアンの評判が悪くなるわけではないのです。二人の若い大金持ちがひどく傷ついたということです。彼女は二人とも拒否したわけだ。彼女には見た目もお金も関係なかったのですね。」

「そうとは言っていませんよ」とデンビー夫人は抜け目なく言った。「あの子はそういうことだけを気にするわけではないということです。才能やその他すべてのことを気にしているので

す。それで、スティーブン、あなたが単にお金持ちというだけだったら……」とその善良な女性は無邪気につけ足した。

バクスターは帽子を取り上げた。「もしエベレットさんにご結婚なさりたければ、あまりキングさんやヤングさんのことをお話にならない方がよくなってよ。」

この会話から二日後、彼はマリアンと直接話をした。読者の皆さんは彼の自信が容易に動揺してしまうのを見て彼のことをあまり好ましく思わなくなったかもしれない。しかし、思いがけず現れたマリアンのこれらの側面を軽く見過ごすわけにはいかなかった。彼にとって愛は情熱であった。彼女にとって、彼は信じざるを得なかったのだが、愛は趣味の悪い気晴らしに過ぎなかったのだ。彼は激しい気性の男性だった。彼はすぐ要点に触れた。

「マリアン」と彼は言った。「君は僕を欺いていたんだね。」

マリアンは彼が何のことを言っているのかよく分かっていた。彼女には、自分が自分の婚約にうんざりしていることがよく分かっていた。そして、ヤング氏やキング氏に対する彼女の振る舞いがどんなに無邪気なものであっても、それはバクスターに対する重大な裏切りだったのだ。彼女はダメージを受け、二人の婚約はすっかり破棄されたと感じた。スティーブンは中途半端な言い訳や否定に納得しないことは分かっていたが、彼女にはそれ以外に伝えられるものがなかった。いくら言葉を費やしても完全な告白にはならなかっただろう。そこで彼女は、気に揉むことをやめてしまった「将来」を守ろうとはせず、単に自分の威厳だけを守ろうとした。生まれつきの半分冷笑的な落ち着いた性格によって彼女の威厳は当面の間十分守られた。しかし、同じ品のないこの落ち着きのために、冷酷で浅はかだという印象がスティーブンの記憶の中に残った。そしてそれは、少なくともその記憶の中では、真実の重みと価値あるものを求める彼女にとって永遠に致命的であることが宿命づけられていた。彼女に説明を求め、彼女の振る舞いに介入しようとするスティーブンの権利をマリアンは否定した。婚約を解消しようという彼の提案を彼女はほとんど予期していた。彼女は涙という単純なロジックを使うことさえ否定した。当然、このような状況では二人の話し合いは長いものではなかった。

敷居のところ立ってバクスターは言った。「君は最も表面的で最も冷酷な女性だ。」

彼はすぐにパリを立ちスペインに向かった。彼は夏が来るまでそこに滞在した。五月にデンビー夫人とその連れ的女性はイギリスに渡った。デンビー夫人はそこで夫の知り合いを通じて多くのつき合いがあった。まったくイギリス的でないマリアンの美しさは大変もてはやされた。九月に彼らはアメリカに向かって出発した。したがって、バクスターがエベレットと別れてニューヨークで再会するまでの間に一年と半年という時間が経っていた。

この間にバクスターの傷が癒える時間があった。とても激しいものだったが彼の悲しみは長く続くものではなかった。彼がついにいつもの落ち着きを取り戻したとき、ちょっとした心の痛みと引き換えに心の落ち着きを取り戻せたことを彼は大変喜んでいて。落ち着いた気持ちでエベレットのことを考えてみると、エベレットは彼が望んでいた女性とはまったく違って、

結局のところ彼が選ぶ女性ではなかったのだと結論づけた。「よかった」と彼は自分に言った。「もう終わったんだ。彼女はどうしようもなく軽薄で、中身がなく、平凡で品のない女性なんだ。」彼の納得の仕方にはどこか熱っぽく急ぐようなところがあった。それは気まぐれな情熱の中でどこかわざとらしく非現実的だった。その情熱の半分は、デンビー夫人のほとんど暗示的ともいえる寛容さや怠惰については言うまでもなく、情景や気候、またはその両方、とりわけその若い女性の絵のような美しさがもたらしたものであった。マドリッドではベラスケスに夢中になっている自分に気がついて、彼はマリ안의ことをすっかり自分の思考の中から追い出してしまっていた。ここで私は、エベレットに対するバクスターの結論が最終的なものと言うつもりはない。しかし、少なくともそれは慎重に考え抜かれたものだった。さらに、感傷的な幻想の影響の下で彼女の魅力や美点に彼が付与した十分な公平性は、その幻想から彼が自由になったとき、彼女の性質の不毛な部分に対する彼の評価を記録しておく権利を彼に与えた。彼の不当な行為や残酷さをエベレットが責めることは容易だったかもしれない。しかし、それでもこの事実は、彼は持てる力のすべてを用いて真実を求めたという彼の申し立てを支持するであろう。それとは対照的に、マリアンは真実に無関心であったのだ。彼女の竦んだ心の中では、彼女の振る舞いに対する彼の怒りの発言が共鳴するものは何もなくあった。

今や読者の皆さんは、この二人の古い友人が面と向かい合ったとき、どのような感情を持っていたか十分にお分かりになると思う。しかし、これらの感情の大部分を時間の経過がやわらげていたことをつけ加えておく必要がある。相手が気まずそうにしているとか、自分が気まずく感じているということは言うまでもなく、幻想から目が覚めた男以上につき合いやすい相手を女性は望むべきではないと考えることは当然であるように私には思われる。もちろん、幻想から目が覚める過程が完全に終わっており、それが完了してからいくばくかの時間が経過しているということが前提ではあるが。

マリアン自身はまったく落ち着いていた。苦痛に満ちた最後の話し合いのときに彼女が保っていたあの落ち着き——もうちょっとで彼女の哲学とでも呼んでしまいそうな——あの落ち着きは、今、この再会のときに失うためのものではなかったのである。彼女は昔の恋人に対していかなる敵意も持っていなかった。彼女の判断においてはすべての言葉がそうであるように、彼の最後の言葉も単なる言葉のあやに過ぎなかった。少女時代の最後の日々においてマリアンはあまりにも気分が良かったので、彼女の過去には許すことができないことなど何一つとしてなかったのだ。

彼の発言の直截さに少し顔を赤らめたが、顔色を失うということはなかった。彼女は自分の機嫌の良さを奮い立たせた。「実際のところはね、バクスターさん」と彼女は言った。「今のところ私はこの世界ととても上手くいっているのよ。すべてがバラ色に見えるの。未来と同じように過去も。」

「僕もこの世の中とはとても上手くいっているさ」とバクスターは言った。「僕の気持ちも君

が過去と呼ぶものすっかり和解しているよ。それでも、そのことを考えるととても不愉快になるけどね。」

「ああ、それでは」とエベレットはとても愛らしく言った。「和解したとは言えないと思いませんわ。」

バクスターは笑った。その笑い声がとても大きかったので、エベレットは振り返って父親を見た。しかし、彼女の父親はまだ礼儀正しく眠っていた。「僕が君のように立派なクリスチャンでないことは間違いないさ。でも、君に再び会うことができるととても嬉しく思っていることは自信を持って言うことができる」とバクスターは言った。

「そう言いさえすれば、私たちはまた友だちでいられるのです」とマリアンは言った。

「それ以外のものになろうとしたなんて僕たちは愚かだったよ。」

「『愚か』でした。しかし、それはとてもかわいい愚かさでしたわ。」

「そうじゃないよ、エベレット。僕は芸術家だ。だから『かわいい』という言葉の使い方については僕がその権利を要求するよ。君はそこでこの言葉を使うべきではない。あんなに醜い終わり方をしたことに『かわいい』という言葉は使えないよ。」

「じゃあ、お好きなように。あれからどうされていたの？」

「旅行をしたり仕事をしたり。仕事の面ではかなり進歩したよ。帰国する少し前に婚約したんだ。」

「婚約？ — 素晴らしいわ。素敵なお方？ — 美しい方？」

「美しいという意味じゃ君の足元にも及ばないさ。」

「ということは、その方は無限に善良なお方なのね。その方がそうであることを私が望んでいるのは本当ですわ。でも、なぜその方をおいてこられたの？」

「彼女には姉がいてね。気の毒に病気になるんだ。それでライン川のミネラル水を飲んでるんだよ。寒くなるまではそこにいることを望んでいるんだ。数週間後に彼女たちも帰国して、そうすれば僕たちはすぐに結婚することになっている。」

「心からお祝いの言葉を贈らせていただくわ」とマリアンは言った。

「私からも同様の言葉をお受け取り下さい」とエベレット氏が目を覚ましながらか言った。二人の会話が何やら堅苦しくなったときにはいつでも本能的に目を覚ますのだった。

彼の仕事の大部分は写真で間に合ったので、マリアンがバクスターのためにモデルの役を引き受けたのはそれから三回だけだった。そのいずれにもエベレット氏は同席し、眠気をもよおす自分の立場に相変わらず微妙に敏感だった。しかし、どちらの側もそれ以上彼らの昔の関係については触れないという慎み深さを備えており、あまり個人的ではないことに自分たちのおしゃべりを限定していた。

II

ある日の午後、肖像画がほとんど出来上がったとき、ジョン・レノックスは絵の進捗状況を確かめるために人気のないアトリエに入って行った。バクスターとマリアンはその肖像画を始める段階では見ないで欲しいと言っていたので、レノックスにとってはこれが絵を見る初めての機会だった。彼が部屋に入って三十分後、バクスターが不意に入って来て、キャンバスの前で深くもの思いに耽っているレノックスを発見した。バクスターには家の鍵が与えられていたので、気分が乗ってきたときにはただちに仕事に取りかかることができるのだった。

「前を通りかかって、今朝やってしまった間違いを訂正しなければという衝動を抑え切れなかったんです。今ならまだ事の重大さが生々しく心に残っていますから」と彼は言って、仕事に取りかかった。レノックスは立ったままでその様子を眺めていた。

「さてと」とついにその画家は言った。「どうですか、お気に入りでしたか？」

「まったく気に入らないね。」

「どこが気に入らないのか詳しく教えて下さい。あなたの権限には私の実質的な手助けをすることが含まれているのです。」

「気に入らないところをどのように表現していいのかわからないのだよ。とにかく始めに、僕は君の作品に深く敬服していると言わせてくれ。これが今までに君が描いた最高の絵であることは確信しているよ。」

「正直私もそうだと思っています。部分的には本当に素晴らしいところもあります」とバクスターは率直に言った。

「それは一目瞭然だね。しかし、その部分なのかあるいは別の部分なのか、妙に不愉快だ。これが批判じゃないことは分かっている。しかし、自分が恣意的な判断をすることができる権利のために君に報酬を支払ってるんだから。それらの箇所はあまりにも厳しく、強烈すぎて、あまりにも生々しいのだ。一言で言うと、君の絵は怖いんだよ。そしてもし私がマリアンだったら、まるで君が私に暴力をふるったかのように感じるだろう。」

「不愉快な部分についてはお詫びします。しかし、私はこの絵をリアルに描きたかったのです。私はリアリティを求めたのです。あなたはそれを見られたに違いありません。」

「君の素晴らしさは認めるよ。この同じリアリティに達するために君が用いた自由でしっかりとした手法についてはいくら称賛しても称賛し過ぎることはできないよ。しかし、残酷にならなくても君はリアルに描けるだろ——つまり、それを現実のものにしようとしなくても。」

「私が残酷だなんてとんでもない。残念ですが、レノックスさん、私はあなたを喜ばせる正しい道を選びませんでした。私は絵のことをあまりにも真剣に考えてしまったのです。私はその完全性のためにやり過ぎてしまいました。しかし、その絵がたとえあなたを喜ばせることができなくても、他の人を喜ばせることはできるでしょう。」

「そのことに疑いの余地はないね。しかし、問題はそのことじゃないんだ。その絵が千倍良くなることのできるほど十分素晴らしいということなんだ。」

「その絵には永遠に改善される余地があることは、もちろん、否定しませんよ。どうすればもっと良くなるか自分のやるべきことが分かっている箇所もいくつかあります。しかし、実質的なものとして肖像画はそこにあるのです。あなたが気に入らないことが何なのかお教えしましょう。私の作品は『古典的』ではありません。結局のところ、私は天才ではないということです。」

「いいや、私はむしろ君は天才ではないかと疑っているのだ。しかし、君が言うように、君の作品は古典的ではない。私はやはり僕の残酷という言葉にこだわるよ。いいかい？君はあまりにも多くのことを描き込んでしまっているのだ。気の毒なエベレットに、彼女がプロのモデルであるかのような印象を君は持たせてしまったのだよ。」

「もしそれが本当なら、私は間違ったことをしました。彼女ほど落ち着いていて自然なモデルはいませんでした。彼女を見ているのは楽しいものです。」

「ああ、その落ち着きも君が与えたものなんだよ。もう何が問題なのか分からない。もういいよ。」

「絵が完成するまで判断を保留しておくのがいいと思います」とバクスターは言った。「古典的な要素があるのは確かですが、私はまだそれを明らかにしておりません。二、三日お待ち下さい。そうすればそれは表面に現れます。」

レノックスはバクスターを一人にした。バクスターは筆をとり、日が落ちるまで懸命に絵を描いていた。絵が見えなくなるほど暗くなってバクスターはやっと筆を置いた。彼が出て行こうとしたとき、レノックスは廊下で彼に会った。

「永続する記念碑を建立せり」とバクスターは言った。「終わりました。安心してご鑑賞下さい。私は明日戻って来て、あなたのご意見を伺いたと思います。」

画家が家を出て行ったとき、その家の主は半ダースばかりの明かりを点け、絵を観察しに戻った。その絵は画家がたった今ほどこした手直しのおかげで見違えるほど素晴らしくなっていた。そしてそれは、バクスターが言ったように古典的な要素が解放されたということであろうと、レノックスがより好意的な気分になっていたということであろうと、独創的で力強い作品であるという印象をレノックスはその絵から受けた。それは正真正銘の肖像画であり、人の顔と姿について深く考え抜かれた絵であった。それは真実のマリアンであり、とても慎重に検討され観察されたマリアンだった。彼女の美しさがそこにあった。彼女の愛らしさ、若々しさ、優美な気品が永遠にとどめられ、これからも決して侵されることなく存在し続けるのである。この肖像画の着想と構成ほどシンプルなものはあり得なかった。彼女の座った姿はとても落ち着いていて、わずかに右方向を見つめていた。頭は真っ直ぐに伸び、両手——指輪もブレスレットもしていない清純な両手は無造作に両膝の上に置かれていた。ブロンドの髪は丸く小さく

結ばれ頭の上に乗っていた（それが当時の流行だった）。そして、ほとんど子供のような耳や頬の形は自然な感じをとどめていた。目は色が豊かで、満足感にあふれて明るかった。上下の唇はかすかに開かれていた。厳密に言うと、肖像画は色彩あふれるという感じではなかった。しかし、暗い色のカーテンが反射した光の感じを出しており、赤味や青味を帯びた肌が躍動する生命と健康を表現していた。作品は力強くかつシンプルだった。そこに描かれている人物には気取ったところや堅苦しいところがまったくなく、すばらしく優雅であった。

「これが画家であるということなんだ」とレノックスは思った。「これらすべてがこの二時間の間に行われたんだ。」

間違いなくこれは彼を虜にした魅力のすべてを備えたマリアンだった。魅力あふれる自信、優美な明るさ、女性特有の雰囲気、これらの魅力は、彼女を見る彼を今なお虜にするのだった。しかし、この絵を見ている彼の目に苦痛に満ちた表情が現れた。それはしばらくそこにとどまり、ひどく重苦しいものへと変化していった。

レノックスは、男がなり得る限りにおいて真実の恋人であった。しかし、人にまつわる様々なことについて十五年にわたる経験があり、それにもとづく分別を持って彼女を愛した。彼には洞察力があり、彼は好んでそれを用いた。マリアンはよく、表情豊かな唇と目で彼女が本来持つ宝物を彼の胸に注ぎ込むのであった。彼はそれらを両手に取り、口づけと情熱的な誓いの言葉で覆った。そして突然の身震いととともにそれらすべてを落とし、声に出さずに叫ぶのだった。「ああ、しかし！心はどこにあるのだ？」ある日彼は彼女に言ったことがある（明らかに当面の問題とは関係なく）、「マリアン、君の心はどこにあるのだ？」

「どこって—— どういう意味かしら？」とエベレットは言った。

「僕は君のことを朝から晩まで考えているのさ。君を一つに組み立てたり、ばらばらにしたりしているのさ、人がよく文字から言葉を作るゲームをするように。でも、いつも文字が一つ足りないんだ。僕は君の心に触れることができないんだよ。」

「ジョン、私の心は」とマリアンは聡明に答えた。「言葉全体なのです。私の心はあらゆる場所にあるのです。」

これはまさしく真実だったかもしれない。エベレットは彼女の体全体を通して彼女の心を偏りなく分配していたのだ。そして、当然の結果として、それが本来あるべき場所にはいくらか乏しいものしか残っていなかった。レノックスが腰をおろしてバクスターの完成した手作りの作品を見ていると、同じ疑問が彼の口もとに再び込み上げてきた。しかし、仮にマリアンの肖像画がその疑問を暗示していたとしても、肖像画がその問いに答えることはなかった。その問いに答えるためにはマリアン本人が必要であった。何か強い不思議な力がマリアンの心の奥底の声を聞き取り、力強く情熱的な線でそれをキャンバスの上に描き出したかのような気がレノックスにはした。マリアンの身体は軽かった——彼女の魅力はその軽さであった。しかし、彼女の魂もまた軽いということがあり得るのだろうか？彼女は信念も良心もない生き物なのだから

うか？彼女の目の輝きを消し、彼女の唇から笑みを盗んだあの恐ろしい虚無と死は他に何を意味するのだろうか？非常に多くの点においてこの画家は深く正しかったので、その分これらの疑問について理解することができた。彼は知的であると同じ程度に忠誠心も同情心も持ち合わせていた。マリ안의外見については一点も軽んじられたところではなかった。すべての特徴は力強くかつ細心に表現されていた。バクスターは素晴らしい洞察力を備えた男——並ぶ者のない観察者——だったのだろうか？それとも単に、自分で気づく以上に成長しつつあった、ひるむことを知らない忍耐強い画家にすぎなかったのだろうか？単なる画家なら、その作品が大変ふさわしい具体例となっているような、力強く豊かで客観的な方法でエベレットを描き、それ以上のことは何もしないということに満足していたのではないだろうか？というのは、バクスターがそれ以上のことをしたということが明らかだったからだ。彼は自分が知っている以上の何か——想像力や感情を使って——エベレットを描いたのだった。彼はほとんど創作していたのだ。そして彼の創作には真実が含まれていた。レノックスは彼の疑念を晴らすことができなかった。彼自身の心が提供できるものを除けばその肖像画には想像力のかけらも認められないと信じることができれば、そして、肖像画の目と唇に浮かぶ非現実的な愛らしさは、若さと無邪気さの微笑にすぎないと信じる事ができれば彼は喜んだであろう。彼は混乱していた——彼は愚かなほど疑い深く情緒不安定であった。彼は灯りを消し思いやり深い暗闇の中に肖像画をしまい込んだ。そして、半分はマリアンへの償いの気持ちから、そして半分は自己満足のために、マリアンと一時間を過ごすために彼は上がって行った。少なくとも、彼が見たところによると彼女はいかなる疑念も抱いていなかった。彼女は肖像画を大成功だと考えており、そのままの形で後世に伝えられることを望んでいた。レノックスは入って来たが、もう一度絵を見るためにアトリエに戻って行った。今度は一つだけ灯りを点けた。ああ！もっとたくさん灯りが点いているときよりひどい。彼は急いでガス灯を消した。

約束どおりバクスターは次の日やって来た。気の毒なレノックスが十二時間もの間中断することなく沈黙考していた一方で、バクスターが見るところによると、混迷の度を示す彼の目の表情の激しさはバクスターの能力への単なる賛辞とはまったく違う意味を持っていることを明確に示していた。

「この男が嫉妬しているということなどあり得るのだろうか？」とバクスターは考えた。ステイブンは純粋に素晴らしい肖像画を描こうということ以上の意図を持ち合わせていなかった。彼の良心にはレノックスが苦しんでいる理由が分からなかった。しかし、バクスターはこの男性を気の毒に思い始めた。実際、バクスターは最初から彼に同情しそうであったのだ。彼はレノックスが好きだったし尊敬もしていた。見識もあり感情の豊かな人物だと思っていた。強力な霊的必要性から生まれたこのような男性が、自らの宿命をマリアン・エベレットの宿命と結びつけなければならぬなんて残念なことだとバクスターは思っていた。しかしバクスターはすぐに、レノックスには自分がどうするつもりなのか良く分かっていて、彼には何も言う

必要はないのだと判断していた。結婚のリスクと利点をレノックスはよく考慮し、目をよく開いて結婚するのだ。人にはそれぞれ好みがあるし、三五歳のジョン・レノックスは、エベレットが見かけどおりの女性ではまったくないかもしれないと忠告されなければならない年齢ではない。バクスターはこのように、レノックスは二人目の妻として可愛いだけの女性——人をもてなしたり、彼の金を絵のように美しく使ったりすることに才能のある女性——を意図的に選んだのだと思い込んだ。バクスターにはこの気の毒な男性の情熱の真剣な性質については何も分からなかったし、バクスターが幻想と呼ぶものにレノックスの幸せがどの程度抱き込まれてしまっているのかも分からなかった。彼の唯一の関心事は仕事を上手く上げることだけだった。人を魅了するマリ안의顔に対して彼が以前持っていた関心のおかげで、その分だけ彼の仕事は上手く上がった。性格造形におけるあの力、そして、レノックスの関心を捉えた現実のあの深さを実際バクスターが肖像画の中に吹き込んだことは紛れもない事実だった。しかしそれは、彼がまったく意識せず悪意を持たずにしたことだった。バクスターの芸術家としての気質が失望を糧にし、喜びと苦悩によって脂肪を蓄え、バクスターの人としての部分に旺盛な影響力を発揮した。つまり、簡単に言ってしまうと、この若い男性は本当の意味で芸術家だったということである。強力で感じやすい彼の性質の測り知れない奥深い所で、彼の才能は彼の心と交感し、失望と諦めという重荷をキャンバスの上に移し換えたのであった。マリアンとのちょっとした関係のあと、バクスターは一生愛し続け信頼し続けることができると感じた若い女性と知り合った。この新しい感情によって目を覚まされ力づけられた彼は、古い恋愛によってできた不足をよりはっきりとした明晰さで埋めることができた。それゆえ彼は心を込めて肖像画を描くことができた。彼にはそれ以外に何かできることがあるなどエベレットには想像もできなかっただろう。彼は心の底から正直に最善を尽くした。その確信は招かれなくても訪れたし、そのために彼の正直さはさらに優れたものとなった。

レノックスは彼の運命の花嫁とバクスターが知り合った経緯について強い好奇心を抱き始めた。しかし、そこには嫉妬心はまったくなかった。どういうわけか、嫉妬することなどもう二度とあり得ないと彼は感じていた。しかし、彼らの以前の会話の内容を考えると、彼が肖像画に何か決定的な欠陥を発見したとバクスターに疑いを持たせないことが大切であった。

「昔君がエベレットと知り合いだったことが君には非常に役に立っているようだね」とレノックスは率直に言った。

「そのようですね」とバクスターは答えた。「実際、描き始めるとすぐに、はっきりと覚えていなかった曲のように彼女の顔が甦ってきました。当時彼女は本当に可愛いかったです。」

「今より二歳若かったんだね。」

「ええ。僕も二歳若かったのです。まったくそのとおりです。あなたのおっしゃることは正しい。私は私の古い印象を利用させていただきました。」

バクスターはそこまでは喜んで告白したけれども、マリアン自身が秘密にしておこうとして

いることは一切言わないでおこうと心に決めていた。マリアンが昔の婚約のことをレノックスに話していないことに彼は驚かなかった。彼はそこまでは予想していた。しかし、彼女があえて触れていないことについて彼の方で何かすることについては彼は許すことができなかったであろう。

レノックスの感覚は苦痛と疑惑で鋭く研ぎ澄まされ、黙っておこうというバクスターの意図を彼の目の中に見ずにはいられなかった。彼は思いきってそのことに触れてみた。

「ところで」と彼は言った。「前からずっと気になっていたんだが、君は以前エベレットのことが好きだったんじゃないのかね？」

「迷わず『はい』と言いますよ」とバクスターは、一般論として本当のことを認める方が、具体的に何かを否定するよりも役に立つと考えて答えた。「私が思うに、私も何千人のうちの一人だということです。あるいは多分、ほんの百人のうちの一人だったかもしれません。いずれにせよ、ご存知のようにそのことはもう終わったことですし、私は今婚約しているんです。」

レノックスの顔色がぱっと明るくなった。「それだ」と彼は言った。「君の絵の何が気に入らなかったのか今分かったよ——視点なんだ。嫉妬しているわけではないんだ」と彼はつけ加えた。「もしそうなら絵のことをもっと気に入っていただろうからね。明らかに君はあの気の毒な女性のことをまったく気にかけていないんだ。君はあまりにも完璧に君の恋を克服してしまったんだ。君は彼女のことが好きだった。しかし彼女は君に無関心だった。そして今君はその復讐をしているんだ。」悲しみに気持ちが混乱して、レノックスは理屈に合わない怒りの中に逃げ込んだ。

バクスターは困惑した。「それでは認めていただけると思うのですが」と笑って彼は言った。「これは見事な復讐でしょう。」そして彼の職業的な自尊心のすべてが彼を支えるために動員された。「私はエベレットのために今までにアメリカで描かれた最高の肖像画を描きました。彼女自身はとても満足しています。」

「ああ！」とレノックスは大いに取り繕って言った。「マリアンは心が広いんだよ。」

「それでは」とバクスターは言った。「あなたは何かご不満なのです？あなたは私の不名誉な振る舞いを批判されているのですから、私には説明を求める権利があると思うのですが。」バクスター自身の気持ちが高ぶり、それとともに自分の肖像画の功績に対する気持ちも高ぶってきた。「私がいったいエベレットの表情をどのように歪曲したとおっしゃるのですか？彼女の姿をどのように偽って描いたとおっしゃるのでしょうか？この肖像画に何が欠けているのですか？下手だとおっしゃるのですか？それとも低俗だと？曖昧だとおっしゃるのですか？それとも下品だと？」これらの非難を数え上げていくうちにバクスターは冷静さを失った。「もう十分だ！」とバクスターは叫んだ。「絵が素晴らしい出来であることは私と同様あなたにも分かるでしょう。」

「そのことをあえて否定しようというつもりなどないよ。ただ、マリアンが喜んで君のところ

に来たことを不思議に思っているだけだよ。」

これはバクスターの大いなる名誉だと言えるのだが、彼はマリアンを裏切らないという自分の決意を厳として守りとおし、彼女を裏切るよりは、自分が拒否された崇拜者であるとレノックスに喜んで思わせておいた。

「ああ、あなたのおっしゃるとおり」と彼は語気を強めて言った。「エベレットはとても心が広いのです！」

レノックスは愚かにも、この発言をバクスターが自分の正しさを認めたものと解釈した。

「バクスター君」とレノックスは言った。「これが君の復讐だと僕が言うとき、それを君が気まぐれにしたとか意識的にしたとかということを僕は言いたいわけじゃないんだ。ねえ、君に何ができたと言うんだい？ 失望は比例していたんだ。失ったものとその失望に対する反応とにね。」

「ええ、そういうことだと思います。でも一方、無駄かもしれませんが、私はどこで間違いを犯したのか分かるかもしれないと思って待っているのです。」

レノックスはバクスターから絵に目をやり、絵から再びバクスターに目を戻した。

「さあ、どうぞ言って下さい」とバクスターは言った。「現実のエベレットが魅力的であるのを私はただ単に絵に描いただけだと。」

「ああ、彼女の魅力なんてどうでもいいのだ！」とレノックスは叫んだ。

「レノックスさん、もしあなたが紳士でないのなら」とバクスターは続けた。「気性は激しいけれども、あなたのことを紳士だと思っていますが、私が思うのは——」

「君が思うのは——？」

「あなたは単に肖像画の品を下げることに熱心なだけだったと思います。」

レノックスは著しく冷静さを失った身振りをした。バクスターが突然笑い始め議論は終わった。バクスターは本能的に筆を取り、絵の中に潜んでいる欠陥を突き止めたいという漠然とした欲求とともにキャンバスに近づいた。その間、レノックスは帰る支度をしていた。

「もう少しいて下さい！」と、レノックスが部屋を出て行こうとしたとき、画家は言った。「もしこの絵が本当に気に入らないのなら塗り潰します。そう言って下さい。」そして彼は黒いインクが染みた大きな筆を取り上げた。

しかしレノックスはきっぱりと首を振り部屋を出て行った。しかし、次の瞬間彼は再び現れた。「塗り潰してもいいよ」と彼は言った。「その絵はもちろんすでに僕のものだから。」

しかしバクスターは首を横に振った。「ああ！ もう手遅れです」と彼は答えた。「あなたはチャンスを逃してしまいました。」

レノックスはエベレット氏のアパートへ直接向かった。何人かの朝の訪問客と一緒にマリアンは客間にいた。レノックスは彼女が彼らを追い払ってしまうまで座って待っていた。二人だけになったときマリアンは、申し分ない気品と精神で彼女を訪ねて来る男たちのことを笑い、

彼らの気取った態度をおどけて真似てみたりし始めた。しかし彼女をさえぎりレノックスは肖像画の方へ戻った。彼は前日の夜に持っていた不服を反省し、今はその肖像画が気に入っていた。

「でもマリアン」とレノックスは言った。「君が喜んでバクスター君のところに行ったのには驚くよ。」

「どうしてかしら？」とマリアンは警戒して聞いた。レノックスが何かを知ったことが彼女には分かった。しかし、彼がどこまで知っているのかが分かるまで、彼女の方からそのことについて触れるつもりはなかった。

「昔の恋人というのはいつも危険なものだよ。」

「昔の恋人？」マリアンはまったく嘘偽りなく顔を赤らめたが、すぐに落ち着きを取り戻した。「ねえ、どこでそのようなチャーミングなニュースをお知りになったの？」

「ああ、ひょんなことからね」とレノックスは言った。

マリアンは少し戸惑っていた。そして「ええ、昔は勇気がありましたの」と笑みをうかべて言った。

「なぜ君は僕に話さなかったのかな？」とレノックスは続けた。

「話さなかったって何をですか、ジョン？」

「なに、バクスターのちょっとした情熱のことだよ。さあ、謙遜などしないで。」

謙遜ですって！マリアンは大きく息をした。「ご自分の妻に謙遜しなくていいとおっしゃるなんて、あなた、どういうおつもり？ お願いですから、私にバクスター氏の情熱についてお尋ねにならないで下さい。私が何を知っているというのですか？」

「君はこのことについて何も知らなかったのかい？」

「ねえ、あなた、私は知らない方が良かったと思っているくらいです。でも、彼は勇敢にもそれを克服して、今は婚約しているのです。」

「確かに婚約しているね。しかし、まったくこだわりがなくなったというわけじゃないんだ。彼は正直な男さ。しかし、彼は自分が好きなことを覚えているんだ。自分の作品が感傷的にならないようにするのに精一杯だったんだ。彼は想像上の君——彼がそうあって欲しいと願っている君——を見ているんだ。そして、道徳的な愛らしさと彼が想像するもののちょっとした外見を君に与えたのだ。そしてそれがもう少しでこの肖像画を台無しにするところだった。バクスターの想像力はそんなにたくましくはなく、この同じ外見は、実際のところ、むなしさを表現しているに過ぎない。幸運にも彼は並外れた才能の持ち主で、本物の画家だ。彼は自分でも知らないうちに素晴らしい肖像画を描き上げたんだ。」

ジョン・レノックスはこのような議論にまで還元されてしまったのである。そして、彼の感覚の根柢は窒息させられてしまった。しかし、恋する者がいったん疑うことを始めると、人はそれを自分の意志で止めることができなくなるのである。今までと同じようにマリアンを信じ、

疑念を持ったり躊躇したりすることなく彼女を受け止めようとする彼の熱心な努力にもかかわらず、絶え間なく襲ってくる不信感や反感という衝動を彼は抑えることがまったくできなくなっていた。魅力は失われた。それを取り戻すことは不可能である。レノックスは、この気の毒な女性の顔つきを見、彼女の言葉をよく考え、彼女の思考を分析し、彼女の動機を推し量りながら、幾分よそよそしく立っていた。

この苦しい試練におけるマリアンの振る舞いはまさに英雄的なものだった。未来の夫の感情の中に何か微妙な変化が起こったことを彼女は感じ取っていた。彼女にはその変化の原因を突き止める力はなかったが、明らかにその変化は彼女の将来を危険にさらすものだった。二人の間に何かは裂けた。彼女は力の半分を失ったのだ。彼女は恐ろしく追い詰められた。彼女が喜んでレノックスに認めていた人格のあの優れた深みが、今、彼女が想像するに、大胆で不吉な意図を覆い隠しているのかもしれない。彼にはこの亀裂を調停することができるのだろうか？人の良い億万長者の妻であるというスパイスの効いた甘く香りのよいお椀を彼女の唇からはね飛ばすことが彼の意図なのだろうか？マリアンは恐る恐る自分の過去に目を向け、何か黒い染みを彼が見つけたのではないかと考えた。実際、その点については、そうできるものならしてみよと彼に挑まないでもなかった。してはいけないようなことを彼女は本当に何もしてなかった。彼女の歴史には目に見えるような汚点は何一つなかった。確かに、ある種の漠然とした道徳的な汚れによって彼女の過去にはかすかに色あせている部分もあるが、他の女性と比べると比較にならない程度のことだった。彼女は楽しみその他には関心がなかった。しかし、それ以外の何に向かって少女は育つというのだろうか？大体において、彼女は気楽に暮らしてきたのではないだろうか？そのとおりで彼女は自分に納得させた。しかしそれでも、もしジョンが婚約を破棄したいと願ったら、彼女の振る舞いにおける問題の程度ではなく、高度に抽象的な根拠にもとづいて彼はそうするだろうと彼女は感じた。それは単に彼女のことを愛さなくなったということである。彼女が親切にもこの状況を見過ごし、気持ちの上の恩義は断念すると彼に請け合っても彼女には何の役にも立たないだろう。しかし、彼女が感じていたぞっとするような心配にもかかわらず、彼女は微笑み続けていた。

数日が経過し、まだ婚約中であることを承諾していた。結婚までわずか一週間と迫っていた——六日、五日、四日と迫った。エベレットの笑みはあまり機械的ではなくなっていた。見たところジョンは——彼のような性質の男においては仕方がないことだが——彼女にはどうすることもできない道徳的、知的危機をやり過ごしたようだった。結婚式の前夜、彼は自分の気持ちを確認してみた。彼は自分がもはや若くなく、気まぐれな情熱を抱く能力のないことに気がついていて、彼には、物事をありのままに受け止め、自分が愛のためにではなく友情のために、そしておそらくは、少しばかりの打算のために結婚するのだという決心ができていた。彼がこの常識的な見解をマリアンに知らせなかったとしたら、それは、この問題に対して彼女自身が抱いているより高貴な理論だと、彼が考えているものへの気遣いからに過ぎなかった。マリア

ンの仮説はそのようなものだった。

レノックスは結婚式を十月の最後の木曜日と決めた。それに先立つ金曜日、彼がブロードウェイを歩いているとき、注文してあった肖像画の額ができているかどうか確かめるためにグーピーズに立ち寄った。絵は店の方に運び込まれていた。バクスターの求めにレノックスも快く同意してあったので、肖像画は、適切な額に入れられたあと、数日のあいだ展示室に飾られていた。レノックスはそれを見に行った。

肖像画はホールの端にイーゼルに乗せて展示されていた。三名の鑑賞者——男性が一人と女性が二人——がその前に立っていた。その三名以外にホールには人はいなかった。レノックスが絵の方に向かって進むと、その男性がバクスターだということが分かった。バクスターは彼の連れ的女性をレノックスに紹介した。レノックスには若い方の女性がバクスターの婚約者だということが分かった。もう一方の女性は彼女の姉で、質素で顔色が悪く、どこか健康を害しているような様子だった。彼女は椅子に腰かけていて話そうとはしなかった。バクスターは彼女たちがヨーロッパから前日到着したばかりで、彼の最初の関心が彼女たちに彼の傑作を見せることにあったのだと説明した。

「サラはこの肖像画の価値を貶めるほどにモデルのことを褒めるのです」と彼が言った。

サラは黒い髪をした二十歳の背の高い女性で、明るく黒い目をしていて、まばゆいばかりの白い歯が笑みからこぼれていた。間違いなく素晴らしい女性だった。率直に共感したまなざしでレノックスの方に振り向くと、深く豊かな声で彼女は言った。

「本当に美しい女性ですわ。」

「ええ、彼女は美しい女性です」と彼女の感じの良い顔から目を離さずにレノックスは言った。「彼女とお知り合いになっていただきたいのです——そして、彼女にもあなたのことを知ってもらいたいです。」

「是非、お目にかかりたいと思いますわ」とサラは言った。

「この絵は本物と同じくらい上手く描けています」とレノックスは言った。「バクスター氏は偉大なる天才です。」

「バクスターに才能があることは分かります。しかし、それが最高の状態にあったところで、絵とは一体何なのでしょう？この二年間私は絵以外のものを何も見ませんでした。そして、一人として可愛い女性を見なかったのです。」

その若い女性は明らかにその絵を称賛して立ったまま見続けていた。バクスターが彼女の姉と話をしている間、レノックスは、バクスターの婚約者を長い間秘かに観察していた。彼女の顔は絵の中のマリ안의顔のほとんど真横にあった。一瞬、新鮮で力強く生き生きとした彼女の表情がキャンバス上の線や色を見えなくしてしまったように思えた。しかしレノックスが見ていると、次の瞬間、バラ色をしたマリ안의顔の輪郭が、情け容赦のない明瞭さをともなって燃え上がった。そして、冷笑的な馴れ馴れしさで彼女の何気ない青い目が彼の目を覗き込ん

でいた。

彼らに唐突に別れを告げ彼は出口に向かった。しかし、ドアのそばで立ち止まった。壁にはバクスターの『最後の公爵夫人』がかかっていた。彼は驚いてその場に立っていた。これが一ヵ月前彼に彼の恋人を思い出させた顔と姿なのだろうか？あの似ていた部分は今どこにいったしまったのだろうか？それは今まで一度も存在しなかったかのようにその絵には不在であった。それだけではなく、この絵は新しい肖像画に比べるとはるかに劣るものであった。彼は半分説明を求めたい気持ちに駆られて、あるいは、少なくとも自分の困惑を表現したくてバクスターの方を振り返った。しかしバクスターと彼の婚約者は、かがみ込んで床に近いところに置いてある精密なスケッチ画を仲良く顔を寄せて調べていた。

どのようにその週が過ぎたのか上手く説明できない。今彼の顔を正面から見つめている冷徹な結びつきよりも死の方が好ましいかのように、そして、唯一可能な選択は彼の財産をマリアンに譲り自分の存在を終わらせることであるかのように感じられる瞬間がレノックスにはあった。また、それなりに自分の運命と折り合いをつけているかのような瞬間もあった。彼はただ自分が持っていた古い夢や幻想を集めて、膝の上で折ってしまいさえすればそれでよかったのだ。それでことは済むのだ。しかしそうはせずに、合理的かつ適度な期待のこもった立派な束を集めて、それを結婚式の白いリボンで束ねることはできないのだろうか？彼の愛は死んでしまった。彼の若さも死んでしまった。それですべてお終いだった。そこから悲劇を生み出す必要などなかった。彼の愛の生命力は弱く短命であることが宿命であったので、消えてしまうのなら結婚の後よりも前の方が良かった。結婚に関していうなら、それは予定どおり執り行われるべきだった。なぜなら、それは必ずしも愛の問題ではないからだ。彼にはリアンの将来を奪ってしまうために必要な残酷な首尾一貫性に欠けていた。もし彼が誤って彼女を過大評価したのだとしたら、その責任は彼にあり、その罰を彼女が支払わなければならないとすればそれは残酷なことであっただろう。彼女に問題があったとしてもそれは意図的なものではまったくなく、彼自身に関するかぎり、彼女の意図が善意にもとづくものであることは明らかであった。彼女と一心同体とはいかなくても、少なくとも彼女は誠実な妻であり続けるであろう。

この暗澹とした理屈の力を借りて、レノックスは結婚式の前夜にまで漕ぎつけた。これに先立つ週、エベレットに対する彼の振る舞いは一貫して優しく親切であった。彼の愛を失うことによって彼女はとても大切な宝物を失ってしまったのだと彼は感じた。その代わりに彼は、尽きることのない忠誠を彼女に捧げるのであった。リアンは彼の元気のなさや何か心に奪われているような感じについて聞いてみたが、調子が良くないんだと答えるだけだった。水曜日の午後、彼は馬に乗って長時間外出した。陽が沈むころ帰宅し、古くからいる家政婦に玄関で会った。

「エベレット様の肖像画がちょうど配送されて来たところでございます」と彼女は言った。「素晴らしい額に納められています。何もご指示を伺っておりませんでしたので、勝手にそれを書

斎に入れさせていただきます。お部屋で見られるのが一番かと思いましたので」とその年配の女性はうやうやしく微笑んだ。

レノックスは書斎に入って行った。肖像画は高い背もたれのついた肘掛椅子と背中合わせに置かれて、今にも沈みそうな水平な夕日の光を窓を通して受けていた。彼はその絵の前に立ち、疲れた顔で絵を見つめた。

「ああ！」とついに彼は言った。「マリアンはたぶん神がそう創ったであろうものであるのかもしれない。しかし、この唾棄すべき創造物は愛することもできないし敬意を持つこともできない！」

怒りに満ちた絶望感で周囲を見回した。彼の友人が東洋で買って彼にプレゼントしてくれた短剣に目が行った。それは暖炉の棚の上に飾りとして置かれていた。彼はそれをつかむと、野蛮な歓喜とともに肖像画の美しい顔の部分にまっすぐ突き刺した。彼はそれを真下に引き裂き、本物そっくりに描かれた肖像画に長くて深い裂け目を入れた。それから五、六回思いのまま肖像画を切り刻んだ。その行為は彼に言いようのない安堵感をもたらした。

次の日レノックスが結婚したことをつけ加える必要はないだろう。前日書斎を出るとき、彼は書斎のドアの鍵をかけ、次の日、結婚式の祭壇の前に立っているとき、鍵は彼のベストのポケットの中にあった。したがって、式が終わって彼が町を出発したあとも、二週間後に彼が戻って来るまで肖像画の運命は誰にも知られなかった。彼が自分の偉業をどのようにマリアンに説明し、どのようにバクスターに打ち明けたかを語る必要はないと思う。少なくとも彼は勇敢な表情をしていた。うわさが伝えるところによると、彼は巨額の報酬を画家に支払ったそうである。金額はたぶん誇張されているだろうが、それが相当な金額だったことは間違いない。彼の結婚生活がどのようなものであるか——彼が結婚生活においてどのような運命を生きるか——それを語るにはまた少し早すぎる。まだ三ヶ月と経っていないのだから。